



教職大学院

Newsletter No. 127

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2019.11.9

学び続ける学校をめざして

福井大学教育学部附属義務教育学校 副校長

永廣 裕子

本校は、義務教育学校になって3年目を迎えます。今年1月には前期課程と後期課程の合同職員室である中央棟が完成しました。校訓「自主協同」を柱として、教育目標「未来を創る自己の確立」、めざす子ども像「自立」「協働」「貢献」の実現をめざし、教職員全員が“チーム附属”となって子どもたちの成長を支えています。授業づくりをはじめとして、共に活動する機会が増え、今まで以上に時間をかけて話し合うことが多くなりました。大変なこともあります。集会では2つの美しい校歌が歌われるなど、9年間の子どもたちの成長を直に感じ取ることができ、幸せと喜びは倍以上のものとなりました。

本校の研究主題は「自律的な学びへのイノベーション 探究するコミュニティを培う」、今年度は研究副題を「学びのつながりを紡ぎ、社会を創る力をとらえる」とし、実践研究を推進してきました。

併せて、昨年度から文部科学省研究開発学校指定を拝受し、「社会創生プロジェクト」を創設して、全教科・領域にわたる9年間の協働探究カリキュラム開発に挑戦しています。

2019年5月にOECD(経済協力開発機構)が、「OECD Learning Compass 2030 (OECD 学びの羅針盤 2030)」を公表しました。ここで重視されている概念が“Student Agency (生徒エージェンシー)”です。Agencyとは、「主体的に考え、行動し、責任をもち社会変革を実現していく」という意志や姿勢を意味しています。また、よりよい未来の創造に向けた変革を起こす力として、「新たな価値を創造する力」

「対立やジレンマに対処する力」「責任ある行動をとる力」の3つを挙げています。

本校では、義務教育学校となる20年以上前から「探究」と「コミュニケーション」を大切に協働探究に取り組んできました。見つけた課題から単元を貫く主題を設定し、仲間と協働で探究し、表現して、学んだことを省察して、次の学びに生かしていく。「探究するコミュニティ」で培う9年間の学び全体を通して、協働でよりよいものを創り上げていくことは、まさしく子どもたちが大人になって活躍するであろう30年後の未来の創造に向けて、変革を起こす力を培っているといえるのではないのでしょうか。

しかしながら、本校にもまだまだ課題はあります。子どもたちは想像することは得意としていても、現

内容

巻頭言	(1)
インターンシップ/木曜カンファレンス報告	(2)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより	(4)
夏期集中講座を振り返って	(6)
10月合同カンファレンス報告	(7)
6月ラウンドテーブル報告	(8)
学会参加報告	(14)
札幌ラウンドテーブル報告	(17)
教育研究集会のご案内	(19)
入試情報	(20)
スケジュール・編集後記	(20)

状や実態を見て問題点を探し、自ら実行する力、貢献しようとする力はまだまだ十分とはいえません。今後、情報化の時代へと急速に変化しても、時代に左右されない人として大切なこと、思いやる気持ち、礼儀、挨拶、奉仕の精神などの人間力も、これまで以上に丁寧に育んでいきたいと考えています。このような力は、“社会情動的スキル”と呼ばれ、「OECD 学びの羅針盤 2030」では、“学びの中核的な基盤”の一つとされています。私たち教師も、子どもたちとともにそれらを大切にしながら、学び続ける教師集団でありたいと考えております。

また、学校をマネジメントする立場としては、「働き方改革」が最大の課題です。「働き方改革」は勤務時間を減らすことではなく、最終の目的は「教育の質の向上」です。改革を進めることで勤務にゆとりを取り戻し、子どもと向き合う時間や授業研究の時間をきちんと確保することが教育の質の向上につながらなければなりません。

まずは、教職員の勤務時間管理や健康安全管理を関係機関と連携しながら今以上に丁寧にやってい

きたいです。一人一人が的確にタイムマネジメントや自己管理をする力を養うことも大切です。また、業務のあり方については業務負担のバランスを考慮した適切な分担を考えていく必要があります。行事が本当に子どもたちにとって価値あるものになっているのかを考えることも含めて、教職員同士で話し合う場を設け、その内容を考慮しながら、来年度の適正化を図っていきます。

このように、学校現場における課題は山積みです。時には、闇の中をさまよっているような気持ちになることもあります。しかし、いつの間にか目の前が明るくなり解決して目標に向かって歩いていけるのは、子どもたちに対して真剣に向き合い、何でも話し合える仲間、教職員がいるからです。

今後も私たちは、子どもたち一人一人に愛情と情熱をそそぎ、“チーム附属”として、共に学びながら挑戦し続ける学校をめざしていきます。

インターンシップ/木曜カンファレンス報告

経験してわかること

授業研究・教職専門性開発コース 1年/福井大学附属義務教育学校後期課程 石田 涼

4月に教職大学院に入学し約半年が過ぎようとしている。附属は最初に来た時未知の世界で不安ばかりあったが、授業スタイル、学P（総合的な学習の時間）など徐々に慣れてきた。生徒を教えるというよりは生徒と共に学んでいると表現したほうがいいのかも。それくらい附属でのインターンからの実践からの学びは非常に多い。

まず授業面では、“主体的・対話的な深い学び”という言葉が新学習指導要領に記載されているが実際にはどのような授業を指すのかを、附属に来るまでは理解していなかった。それまでは本当の意味もわからないまま“主体的”という言葉を使っていた。附属の社会科の授業を初めて見させて頂いたとき、“生徒たちが主題を探究すること”“主題を探究するために、先生が的確な発問をすること”“生徒たちが探究していく中から、また新たな疑問を見

つけること”が行われているのを見て驚いた。夏休みまでは、先生方の授業研究では主に先生の動きを見て、グループワークの方法や授業の進め方などを見て、常に自分だったらこうするというを考えて見させて頂いていた。私は、7年生のA組、C組で「縄文時代・弥生時代」と「古墳時代」を実践させていただいた。しかし、実際にやってみると「何が聞きたかったのかわからない」「グループワークの意味は何だったのか?」「なぜウェビングマップを作るのか?」「子どもたちはどのような力が授業で身についたのか?」という疑問が残り一つ一つに意味を持たすことができていなかった。子どもたちの主体性を活かそうとしたが、それらができず收拾がつかなくなってしまう、結局自分で説明して頭でっかちな授業で終わってしまうことがあった。実際に授業に挑戦してみて、子どものことを中心に考え

て授業をデザインできていないことに気づいた。

“縄文時代から弥生時代の変化は良かったのか？悪かったのか？”という主題で子どもたちは「狩猟採集から稲作に代わり食生活が安定した」「生活は安定したが争いが起きた」など自分が思った通りの考えがでてきたが、どこか自分事として子どもたちは捉えていなかったように感じた。実践したことを、木曜カンファレンスや社会科の先生方、同じ附属でインターンの先輩と語り合ったところ、“主題の重要性” “普段の授業から子どもの思考を追うこと”を教えて頂いた。授業には単元を貫く主題があり、そこから自分が何を伝えたいのかを考えずにただ教科書の内容をまとめるだけだと、子どもたちは、主題に対して意義を見出せず深みのない授業になってしまうことを身をもって痛感した。授業実践の終盤でやっと子どもたちとの対話の中から、自分の伝えたかったことが少しばかり出てくるようにはなった。しかし、それを引き出すための発問の仕方や主題の設定、子どもたちの見取りにはまだまだ課題がある。次回の授業実践に向け、先生方の授業を見せて頂くうえで“発問の仕方” “それに対して子どもがどのようなことを考えたのか” “どうしたら子どもたちは課題を自分事として捉えるのか”を見取っていききたい。

また、部活動では男子バレーボール部を見させて頂いている。自分自身バレーボールはずっと続けてきており、自分の中で不安がありつつも少しの自信もあった。しばらくは、インターンとして参加しているといった感じで顧問の先生のサポートや入部したばかりの7年生の指導をした。10月からは外部コーチの登録をさせて頂き、本格的に指導に携わって頂いている。新人戦終了後は、顧問の先生は私

に指導の機会を多く与えてくださる。その中で、より専門的な指導や適切な声かけなどを自分の考えた通りやってみるがわからないことに直面する時もある。そのような場合も、まずは自分で考えてやってみることを意識している。顧問の先生に教えてもらえば簡単であるが、実際にやってみることを通して自分で正解を作る。このスタイルは部活動指導だけでなく、授業でも同じであり、実践で新しい理論を作ること、自分にしかできない指導法の確立、また、やってみて何が良くて、何がダメだったのかを改めて捉えなおすことで、自分の教員としての資質・能力の向上につながる。また、部活動では「人間力」の成長に重きを置いている。勝つことを目指し、同じ競技に打ち込む仲間と高め合うことで、自分とチームの双方の成長を意識することや、あいさつや公の場でのマナーと言った礼儀といったような授業だけでは学べないことを学ぶのが部活動の意義であると考えている。これからもバレーボールの技術だけでなく生徒たちが人として大きく成長できるように努めていきたい。

私が、教職大学院に進学を決めたのは、教員として現場に出ることに自信が無かったからである。授業面や生徒との関わりなど教員の仕事すべてに課題意識がある。今は、大学院生だからこそのできるチャレンジがあり、先生方はたくさんのチャンスを与えてくださる。その中で、いくつも失敗を繰り返したが、経験したからわかったこと、身についたことはたくさんあった。それが今後につながると信じて、“経験してわかること”というタイトルをつけさせて頂いた。それをこれからの教員人生に繋げられるようにインターンに取り組んでいきたい。

ミドルリーダー/マネジメントコースだより

子どもの学びと教師の学びは表裏一体

学校改革マネジメントコース2年/羽島市立中島小学校 石垣 治彦

教職大学院での学びも2年目に入り、長期実践報告をまとめなくてはならない時期に入りました。昨年度の1年間は、何もわからない中、共に学ぶ仲間や職場の方にも支えて頂きながら、教師としての自分を見つめ直してきたような気がします。

カンファレンスでは、職種や年齢も異なる先生からの実践を、なかなか自分の実践と結び付けることができずに悩んだ時期もありました。「今、自分が求めているものは、こうしたものではない。」「もっと具体的に教えてほしい。」と考えて、「自分は何をしているのか。」と思う時もありました。

しかし、昨年の福井大学教育学部附属義務教育学校の教育研究集会に参加した時の子どもたちの姿を見て、「子どもの学びと教師の学びは表裏一体である」ということを実感しました。

研究集会に参加後、自分の担当する理科の授業で、義務教育学校で参観した授業をそのまま実践しました。これまでの子どもたちの授業に向かう姿とは全く異なり、「子どもが主体的に授業に取り組んでいる姿」で授業を進めることができました。また、私が子どもに、指示する言葉が少なくなった（全くなくなった時もある）と感じています。

そこには、新学習指導要領で子どもたちに育むべき「資質・能力」に重きを置いた「指導改善」のエッセンスが詰まっていたと思います。

そうして、これまでの「教師としての自分」を振り返ると、「教師が活躍する授業であった」ことに気づき、「子どもを置き去りにした指導」をしてきたことを思い知らされました。

自分の実践を振り返ることで、新たに「今度はもっとうまくいく実践をしたい」という、気持ちが生まれ、自分の中に、新しいアイデアや疑問、不安が浮かび、それを乗り越えるために、子どもを観察し、教材研究をする。どこかで聞いたサイクルを、自分自身が行っていたと思います。

今年度は、勤務校で欠員があり、4月から、教務主任に加えて担任もしています。さらに、教職大学院での院生もしています。大変忙しい毎日を送っています。しかし、教師人生で、今年ほど充実している年はありません。

また、今年度は大変お忙しい中、三田村先生や中島先生に岐阜に来て頂き、「羽島市の教員研修」や「若手の指導改善等」をして頂きました。「自分の学びを、現場に還元できた」という成果を出せたことをとてもうれしく思います。

福井で学べたことは、自分の教師人生を大きく高めることになりました。しかし、2年間というのは本当に長いようで大変短いと実感しました。残り僅かな院生としての時間を大切にしていき、「資質・能力」を育む授業を羽島市に紹介できるようにしていきたいと思います。

新しい世代を支え学び合うことの意味

学校改革マネジメントコース2年/坂井市立雄島小学校 濱辺 直美

今回はオリエンテーションに現任校の実践を話題提供として発表するという事になった。「新しい世代を支え学び合うことの意味」というテーマは、今年度新採用教諭と学年を組んでいる自分に課されたテーマそのものである。実践というほどのことではないが、日々の取り組みの中で考えたことやこれ

からの自分に取り組むべきことについて、まとめてみた。

これまでの教員経験の中で、実は新採用の先生と学年を組むということがなかった。現任校にも3年前から連続で新採用の先生は赴任してきているが、学年や校務分掌が違うとあまり接点もなかった。し

かし今年、この春大学を卒業したばかりの講師経験のない先生と6年生を組むことになった。「わからないことがあったら聞いてね。」と言っても、正直わからないことがなんなのかわからない、というのが実状である。とにかく、「見ていてね。」「できたら真似してやってみて。」ということからスタートした。新採用のI先生は、若くてやる気に満ちたフレッシュな先生である。「これはこうだよ。」と教えると、「わかりました。」と素直に行動に移し、経験を積んでいく。私だけではなく、授業に入っている教頭や教務などのチームでとなりの学級経営をサポートしている。また1学期は、校長の指導のもと、体育の授業の基本を教えてください、2学期からはI先生が主で授業を進めている。

I先生のような若い世代は、なんと言ってもパソコン関係に強い。6年生の最大の行事である修学旅行では、計画や旅行会社との交渉は私が行ったが、しおり作りや旅行中のブログの更新は、あっという間にやり方を覚えて10回以上の更新をしてくれた。おかげで保護者からは、旅行中の様子がリアルタイムで把握でき大変良かったと大好評だった。このように、できることを増やし、できたらほめ、さらに1歩進んだ次のステップへと誘導することが、新採用だけではない、新しい世代を支えていくことになると考えている。

さらに現任校の実践として、昨年度行ったプチ発表や特別支援教育についての研修など、スムーズな学級経営をするために、全職員が発達障害について共通理解をし大変有意義な時間をもつことができたことも合わせて報告した。

私たちのようなベテランとよばれる者たちが考えて行かねばならないのは、人材育成であると考えている。具体的に現任校で行っているのは、校務分掌や行事の役割を基本的に、若手とベテラン・中堅で組むということである。そこでいっしょに仕事を行うことで、やり方を学ぶことができる。学ぶことの語源は

真似ぶということから、まずは真似をしてやってみる、そこから上手くいくこと、いかないことをよく見きわめながら学ぶことができると思う。そして、慣れてきたら若手に任せるところもつくり、経験をつんでもらうことが大事だと考えている。修学旅行でのブログの更新の例はまさにそれで、適材適所で仕事をこなすことで、自信をもったり、新しい挑戦ができたりすると思っている。

人材育成は、経験させて、のばす。つまり、OJTで育成する。

目標をもたせて、のばす。つまりスモールステップで達成感をもたせる。

できたところをほめて、のばす。つまり、自己肯定感を根幹に据える。などの積み重ねだと考えている。

新しい世代を支え、学び合うとは、若手の見本になることである。“見ていてね”“真似してやってみて”“できなかつたら改善する”これは、I先生と6年生の行事をいっしょにこなしながら、常に私が念頭においている考えである。正直、初めは息苦しいと思ったこともあったが、若手のことを考え、見本になろうとすることで、最前の方法は何だろうと模索している自分に気づくことができた。そしてそれは、これまでの自分を振り返るきっかけにもなった。自分としてはそう気づくことができたことも、大きな収穫だった。若手を育てるなどという大それたことだと思うが、同時にそれは自分自身も成長させることにつながったと自負している。それに加え、やはり教職に必要なのは対話であり、対話することにより生まれるコミュニケーションが教師を育てていくと思う。それこそが、教師の協働につながる最も大切な学びであると考えている。

教職は、児童・生徒を育てる筋書きのない職業である。私は、その尊さを職員すべてが感じながら実践していける職場づくりを目指して、これからも尽力していきたいと思っている。

「長期実践研究報告」の執筆に向けて

学校改革マネジメントコース2年／坂井市立加戸小学校 藤野 秀樹

福井大学教職大学院学校改革マネジメントコースに入学して、早いもので1年半が経った。「長期実践研究報告」という巨大な壁が目前に迫りつつある現在、院生としての2年間の、そして、教員として

のこれまでの「歩み」や「学び」をいかにまとめていくのか、見通しが持たずに不安な日々を過ごしている。漠然とした不安を感じつつも、日々の忙しさを言い訳にして、目を背けているといった方が的確

かもしれない。何を学び、何に取り組んできたのか、少し振り返ってみる。

教職大学院1年目は、坂井市立（丸岡町）長畝小学校に勤務していた。教務主任として4年目。同僚との間にある程度人間関係ができていた職場で、「児童も教職員も通うのが楽しくなる学校づくり」をテーマに取り組みを行ってきた。重点項目として「確かな学力」の育成のためには、「よくわかる授業づくり」が必要であると考え、そのための研修体制を整えることで、授業力の向上、指導技術の向上を目指してきた。具体的には、「教材研究タイム」の設定、「ミニ・ワークショップ」の開催、「授業公開週間」の実施などを行ってきた。しかし、教師の指導技術を少しばかり向上させたところで（指導技術の向上の必要性を否定するわけではないが...）、求められる「学び」には、到底繋がっていかないと感じるようになった。子どもたちが自らの力で課題を解決する力を身につける「学び」に変えていくためには、教員が「変わる」ことが必要であると思うようになった。これは、教職大学院でのカンファレンスやラウンドテーブルに参加し、たくさんの先生方と語り合う中で得た自分自身の「学び」であった。

子どもたちを「愛おしい存在」と感じ、子どもの思いに寄り添い、子どもの力を信じ、子どもに任せること、つまり子どもに対する接し方を「変える」ことは、「授業を変える」のにも「学校を変える」のにも必要なことだという思いを強くし、子どもにとっての「居心地の良さ」「居場所（活躍の場）」についてこれまで以上に意識するようになったところで、坂井市立（三国町）加戸小学校へ異動することとなった。

加戸小学校では、旧門の教え「有書不讀子孫愚（書有れども読まざれば子孫愚かなり）」「有田不耕倉廩虚（田有れども耕さざれば倉廩虚し）」の下、サ

ツマイモの栽培等を中心にした勤労生産学習に力を入れている。その活動には、子どもたちの「活躍の場」があり、「笑顔」が溢れている。

教職大学院2年目、『学習する組織』を読む機会を得て、組織が「学習する組織」となるためには、「共有ビジョン」を持つことの大切さを学んだ。学校という組織において、異なる考え方・背景をもつ教師集団にとっての「共有ビジョン」に成り得るのは、「子どもたちの笑顔」ではないかと考えるようになった。子どもが笑顔で過ごせるようにすることは我々教師の役割であり、笑顔があふれる学校こそ、「通うのが楽しくなる学校」であると考え、様々な活動に取り組んでいる。（と言っても、自分は、子どもたちの笑顔を追いかけて、今年度購入していただいた一眼レフのカメラを持ち、走り回っているだけのような気もするのだが...）

10月からは、4年半ぶりの学級担任（代行）も経験している。と言っても、朝の会、給食、帰りの会、総合的な学習だけの担当である。担任時代のような「こんなクラスにしたい」といった強い思いがあるわけでもなく、肩の力を抜いて、子どもたちに「笑顔」が増えるようにということを意識して、子どもたちに接しているつもりである。その一方で、担任の大変さも改めて感じている。この貴重な経験の中での出来事についても「長期実践研究報告」に描くことができればよいと考えている。

教職大学院で多くの先生方と語り合い、校種が違って共通する問題、抱える悩みを共有できたことは自分にとって大変な財産になっている。利害関係のない「仲間」だからこそ語ることができたのだと思う。残りの数ヶ月間、「仲間」と語り合えることに感謝し、自分の歩みを振り返り、「長期実践研究報告」という壁（ひとつのステップ？）に立ち向かっていきたいと思う。

夏期集中講座を振り返って

Reflections on Summer Intensive Course

ミドルリーダーコース2年/ 福井大学附属義務教育学校後期課程 Naing Win Soe

Teachers as reflective practitioners nowadays need to stop their actions on some points to reflect on what they have been doing in their

teaching or project in the schools. In addition, they should see others' practices from which they can be able to reflect on the learning actions of

their teaching practices. Then, they should read theoretical concepts that are related to their practice since theory-led-practice sustains their practices to come up with new ideas and to improve their future practices. Since there is a symbiotic relationship between theory and practice, theory-led-practice makes their future practice strength a lot. Moreover, they have a chance to disclose their own practices to the groups (home and cross-section). In this case, the home-group is like a team (CoP) which facilitates the practitioners to deal with some challenges of reading theory connected to the practice, especially when the teachers are stuck in how the theory can be applicable to the practice.

Prior to the summer intensive course, teachers are allowed to choose the books of their interest in terms of relation to their practice and to read them in their comfortable places. Thus, teachers are let get voluntarily involved in the program although it is a must to attend this course for teachers on pre or in-service training. Teachers have a chance to reflect on their know-in-action on the previous experiences of the teaching practice to choose the book which is connected to their own practices. Then, they can also examine the approaches in the book to their practice by selecting their suitable book to the practice. While reading the book, they can realize some points relevant to the practice and contemplate the future improvement of the practice.

Different groups are arranged based on various levels of experience and age as well as

position. Because of its seating arrangement, it has been solved demanding issues of generation gap through sharing their experiences different in time and contexts. Dialogues between veteran and novice teachers can bridge a rift in knowledge and opinions between them. Seasoned teachers can recount the historical background of the ground level to novice teachers who can present the current situation and the creative practice. Through listening to the comments of the seasoned teachers, novice teachers will be able to cogitate about their own practice to be improved. So, it is not one way of learning but two ways of learning for two generations, old and young.

The course is not arranged like a conventional lecture design in which a lecturer just transfers the knowledge to the participants without reflective thinking. However, I think, summer intensive course has a reflective design in which the trainees co-inquire with their teams through reading others' practice and the theoretical book throughout the reflective learning cycles of the course. Teams work together in each home group to come up with new ideas that will intensify their own longitudinal practice record of a few members in each group. Reflective learning design is spiraled up, with sharing home groups and cross-sections groups. Reflection is used as a tool for connecting to each stage of learning cycles. Thus, this kind of learning is internalized and perpetuated, totally different from learning through lectures.

10 月合同カンファレンス

共有ベースを作っていく過程での学び

ミドルリーダー養成コース 2 年/さくら認定こども園 西谷 知恵

変化する時代のなかで、学校文化も大きく変わる。世代間の学びの形式が変わり、新しい世代の若手をいかに戦略的に育てていくかが課題として挙がっている現状を踏まえ、グループセッションが行われた。

小学校や中学校の現場でも、半数が 20 代となっている学校があったり、異動で多くの先生が出ていったりと、均等に年齢層が配属されない状況にあるそう

だ。だからこそ各学校で対策がとられ、若手の育成、若手を育てる主任の育成に力が入れている。

この若手の育成は、自身の園での経験に重なる部分が多い。セッションで一緒になった、包み込むようなまなざしが印象的な先生は、考えてほしいからこそ、あえて若手の先生に答えは教えないという。それは自分が若手であったときに、周りの先生方の温かなサポートのもと、動いていた状況を振り返ったことだ。授業作りなど任せるところは任せる、保護者対応は丁寧にしながら、ここぞというところはフォローにまわるといふベテランの先生方の思いを知ることができた。私もさくら認定こども園に入り、最初のがむしゃらに子どもたちと向き合ってきた。力があり魅力ある先生方は、失敗もあった私を温かく見守り、ときには自身の保育観を語って下さったり、ときには的確に支え指導して下さったり、それでも主体は私であるように動いてくださっていた。「やっでござん。」といつも優しく待つ姿勢で私を支えてくれていた先生方も、きっとこのような思いのもと私を教育して下さっていたのだろう。先輩の先生方の気持ちに思いを馳せることができた。

また、秘めた情熱が溢れる院生さんからは、「従来のやり方を1から教えられ、それと同じように行うより、『やっでござん。』と言ってもらえるほうが嬉しい。」という、素直な気持ちを聞くことができた。つい答えを求めそうになってしまう自分を振り返り、先生方のまなざし、声かけ、手助けによって少しずつ自らが動くようになってきたことを語る場面もあった。彼らには確実に周りの先生方の動きが響き、彼らの中で意識や行動の変化を起こしたのだろう。私もさくらの先生方のひとりという恵まれた環境の中で、「やっでござん。」と言ってもらいながら、自分の保育観を作り上げていくことができていたのだ。

セッションを進めるうちに、こうした関係性は、ベテランから若手への一方通行ではないことが再確認された。インターシッブ先でのひとコマを、とても細かく観察し、先生方の指導や連携を見ていた院生さんの語りからは、こんなにもしっかりと先生の動きを見ている若手がいることが、その学校の強みになるであろうと感じた。ベテランの先生の授業を見て吸収したものと、教育実習生の授業を見て吸収

したものの、それぞれに違って自分の学びになったという語りからは、経験を越えて双方に影響し合い、成長し合える関係性ができていることを感じた。新しい世代を支え学び合うというのは、経験ある先生方が一方的に若手の先生を支えるものではなく、様々な考えや経験をもった先生方が、それらを共有する中で生まれてくるものではないか。それぞれの保育観を語り合える場を設け、共有するベースを作っていくことで、さらにさくらは「新しい世代を支え学び合う」仲間、組織となっていくだろう。

カンファレンスを通して、世代を越えた学び合いが大いになされている。先輩の先生からのアドバイスの中で、日々の保育を見直すきっかけを与えていただくこともあれば、院生さんからの悩みに、自身の保育観を考えさせられることもある。

特別支援学級から通常学級に移り、1対30の授業の中で、どこを見ればいいのか戸惑っている院生さんがいらした。その返答として大学の先生からは、授業は生き物であり、30人で1つの生き物を見るのだというアドバイスがなされる。30人の子どもたちの気持ちが乗ってくると、シンクロナイズしてくる。そうすると全員の視線がそろい、雰囲気もそろってくるというのだ。私は日々のクラスでそのようなことを意識してきただろうか。改めて、子どもたちの気持ちをシンクロナイズさせる声かけや働きかけを考えさせられた。

小学校2年生のクラスがまとまらず、自分にできることは何かと休み時間の集団遊びを通してアプローチをかける院生さんもいらした。ここでは発達段階における経験不足が指摘される。人と何かを共有していくことは楽しいことだという経験があるからこそ、クラスが共通の目標を持って生活することができる。このクラスはそういった経験が不足したまま、次のステップに上がらなければいけない困難さに来ているという。ここでも幼児期に経験させておきたい発達課題のポイントを強く意識させられた。

こうした学びを現場に持ち帰り、子どもの姿やそれぞれの保育観を語り合うようにして、先生方と共有する場を作っていくことで、さらに深いさくらの共有ベースが作られていくのだろう。今日の学びをさくらの学びへとつないでいきたい。

6月ラウンドテーブルの報告

Zone A 参加者からの感想

長野市立城山小学校(長野県) 佐々木 直人

福井大学RTに参加する1ヶ月程前に、5年理科の生命の誕生の授業を公開し、メダカの卵を観察する児童の様子を参観いただいた。参観し理科の先生を中心に「児童が互いの顕微鏡を見合って対話をしながらよく観察していた」「どの子も卵の中の様子をくわしくスケッチし、血流や心臓の動きを語り合っていた」と感想をいただいた。一方で、他の先生から「子どもたちは何がわかったのか。わかったことは何もないのではないか」「参観していた班では全く対話はなかった」という感想をいただいた。なぜこんなに違うのか、なぜ通じないかと考えるうちに、「これまでのように、子どもたちと元気に楽しく自然を探索・探究しているだけでは、全校に理科の楽しさは広がっていかない」という思いがわいてきた。そして福井大学ラウンドテーブルに参加する機会をいただき、他の教科の先生とうまく関わられるのか、理解してもらえるのか緊張しながら初日を迎えた。

まず、ポスターセッションでは、小学校や中学校、公民館などの教育施設の先生だけでなく小学生や中学生も実践や研究を発表しており、人だかりができていた。僕は「チーム学校」の発表に注目して発表を伺った。板橋区立赤塚第二中、坂井市立丸岡南中、美浜町立美浜中ではそれぞれ目指す生徒の姿や学力観を定めていることが印象に残った。また、多くの学校が「教科センター方式」というしくみを設けていることに気づいた。初めて聞く用語だったので質問をしたところ、「社会科など普通教室で行っていた授業を、専用の教室を設けて、生徒が授業のたびに移動してくるしくみ」だった。校舎の改築時に社会科室を設けた学校があることや、少子化で空き教室が増えてくるので教科センターの設置ができるのではないかと一緒にいった先生と話した。その中で、「そもそも理科はどの学校でも教科センター方式」なのではないかと考えたり、理科室があっても使われない小学校があることに問題を感じたりして、今までとは少し違った視点で学校を振り返ることを楽しく感じた。

そしてorientation「学校・教育・地域を考える4つのアプローチ」では、Zone A「21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う」に参加した。福井大学附属義務教育学校の五十嵐先生、福井県立若狭高校の小坂先生、大谷大学の荒瀬教授のお話から、研究の組織や仕組みづくりが成功している影には、まわりの先生を巻き込む対話があった。子どもの実際の姿を通して語ることで研究に反対をしている先生と同じ土俵で語り、どんな子どもを育てたいかを伝えること、研究に引っかかりを感じている先生と関心を持って対話することなどが、質問に答える中でエピソードを交えて語られた。自分の関わり方を変化させていく姿勢があつてこそまわりを巻き込めたように僕は感じた。Learn Labを用いた参会者からの書き込みでは、「対話」が多数の書き込みにより大きく示され、その周囲の一言も「どうやったら対話が生まれるか」という点でつながっているように感じた。

2日目は、「実線の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る」として小グループで実践を聞き合った。僕は教職大学院の先生、附属学校の先生と同じテーブルになった。初めに大学院の研究の中で単元の中を数時間飛び込みで授業をされている先生のお話を聞く中で、そもそも自分が毎日授業をしていることが特別なことなのかもしれないと感じ始めた。普段学校にいと児童の人数も勤務時間も同じような仲間にも囲まれていて、児童と接している時間も変わらないような感覚に陥っていたが、冷静に振り返れば午前勤務の先生や複数校掛け持ちで特定の曜日に授業をしている先生、時々来てくださるボランティアの方々など、自分とちがう人が多いことに気づいた。先生の実践では1年生のアサガオの栽培をされていて、その中で色水遊び等の活動に子どもたちは積極的に取り組んでいたが、その活動を教師が仕向けていたのではないかと振り返っていた。育ててきたアサガオをくわしく観察すること、つぼみと実は確かに形が違うと子どもが気づくことなどの提案があつたり、担任の先生とのやりとりや立場

の違いなどの質問があったりした。しかし今あらためて思うのは、この先生はなぜ生活科の授業を選んだのかということだった。ほんの数時間の中で、植物が相手とはいえない思い通りにはならない生き物相手の単元をしようと思った何かがあったはずだと思う。1日目に小坂先生が「『反研究』の先生の研究に対する引っかかりに関心を持って対話する、議論の場に子どもの実際の姿を照らして語る。」と話されていたが、テーブルでお話した先生は『反研究』ではなく、実践をふりかえり探究していく思いがある。そこを聞ければよかったと後悔している。

附属学校の先生からは、福井県内の前任校との違いに戸惑いながらも問題解決のサイクルを通して生徒の成長をうながす実践を伺った。中1理科の植物の学習で、先生はテーマが広がりすぎると感じながらもからだのつくりや環境条件を視点に校地の植物を調査して「なぜ？」を探しに行く場面を設け、生徒はテーマを設定し探究していった。発表された先生の思いとはずれる部分だったが、福井県という学習学力状況調査上位という思いがあったので、前

任校の授業との違いや生徒の様子を質問した。黒板に項目を整理して丁寧に教えていく授業をされていたことや生徒が家庭学習をしっかりすることなどを伺い、自分がそういう授業をしてこなかったことや、そもそも子どもの頃から受けてこなかったこと、福井のいところからもらった家庭学習用の冊子がものすごく問題が多いと感じたことなどを思い出した。丁寧に教えていく授業が学力につながり、活用にもプラスに働いているのだから、どこかで探究につながる要素があるはずと思うと、実際に授業を見に行きたいと強く思った。

同じテーブルでお話した先生とは、学校の仕組みが違ったが、「探究する児童生徒を育てる」という根本でつながっていると実感があつた。教科の違い先生とも、意見の合わなかった先生とも、「自らすすんで教員になり、子どもと接して日々過ごしている」のだからどこか根本でつながっていて、その先生が理科の楽しさを広げているはずとこの原稿を書きながら考え始めている。

Zone C

「ラウンドテーブル」の風に吹かれて

福井市清明公民館主事 金木美東里

はじめに

今回初めてシンポジストなる体験をさせていただき、本当にありがとうございました。「ラウンドテーブル」は平成23年に社会教育主事講習の一環で受講して以来、10回目位の参加だと記憶しておりますが、今回はシンポジストという大役を仰せつかり、緊張と不安という名のネガティブの塊が心に張り付いたままの状況でしたが、何とか80%は思いを伝えられたかなと思っています。

出会い

もう一人のシンポジストの六条小学校の寺前先生との出会い、お世話くださった大学の先生方との出会い。それぞれから学んだことが、今も頭の中にグルグル渦巻いています。私に今のまま歩いていいよと背中を押してくださったことに感謝しています。そして、何故か「ラウンドテーブル」にこれからはずっと参加したいと思っている自分に今驚いています。

雨上がりの虹のように

公民館主事という仕事に日々充実感を覚えながらも、迷いや、時には悲しみや、私の心のひだでは受け止めきれない数々のドラマに翻弄される日々。「ラウンドテーブル」に参加させていただくと、熱心に社会教育を学ぶ方々に刺激され、励まされ、公民館への思いもまた新たになります。

今回、皆さんにお話した事例の中の、青少年教育で6年間取り組んできた夢王国プロジェクトですが、清明公民館で生まれた数多くのドラマのひとつです。子どもたちと家族のようにかかわってきたことは、公民館の役割を超えているかもしれません。子どもたちとの距離感も難しい課題です。しかしながら、子どもたちと一緒にやり遂げたときには、雨上がりの虹のように、爽やかさを感じ、安堵感に包まれます。

持続可能なコミュニティの行方

今回、夢王国プロジェクトのリーダー経験者の畑空吾君（仁愛大学1年生）がシンポジウムに飛び入り参加してくれました。6年間活動してきた彼こそが

持続可能なコミュニティの代表選手のように思えます。フロアの皆さんに熱く語りかけていた姿に成長を感じ、私の心がキュンと言いました。私はコーディネーターである前に、子どもたちの絶大なる応援団でありたいと思っています。

おわりに

「子どもたちは、そのままの年齢で地域活動の担い手だ」と力説しました。だから、学校は地域の担

い手の宝庫です。これからも自由を求めてやまない子どもたちと一緒にワクワク・ドキドキを共有し、自分も解放され、新たなドラマがたくさん生まれることを願い、迷いながら脇道にそれながらも、主事としての思いを貫いていこうと思っています。また、ラウンドテーブルでドラマの続きをお話出来たら幸いです。ありがとうございました。

ラウンドテーブルを終えて

福井市円山公民館主事 齊川 由香里

私にとって今回のラウンドテーブルは3回目の参加になりました。初めての時に比べれば、2日間のおおまかな流れがわかる分余裕が出るのかと思っていましたが、発表をどのような内容とするのか、資料をどうするのかなどを考えるたびに、前回・前々回の方が楽だったのでは思いました。

迎えた一日目、ZONE Cに参加した私は清明公民館の金木主事さんの発表を聞きました。日頃の業務で子どもと関わることの多い私にとって、とても聞きやすい内容でした。その中で特に心に残っているものとして「子ども達との関係を結ぶ中で、どこまでを受け入れてどこで止めるのかの判断に毎回迷う」というお話がありました。さらに同じ日に福井大学の学生さんと、人形劇グループの2年生と3年生の発表を聞く機会に恵まれました。こちらの活動も子ども達をメインにしての活動になっているようで、共通する部分が多くあり、私が質問を受ける場面がありました。質問された内容は、リスクマネジメントについてでした。私達は活動に伴い保険をかけたたりして、事が起こった際に事前に備えていると伝えると、子ども達のことを考えるのであれば必要

ですよねとの答えが返ってきました。人形劇ブロックの活動は昨年結構大変だったらしく、業務を始めて間もない頃の自分と重なるものがありました。そして真剣にグループの運営や活動について語る姿に頼もしさも感じました。カリタス幼稚園の先生のモンテッソーリ教育についての貴重なお話もきけました。

自分のこれまでの活動を振り返ることが日常の業務の中では難しく、発表となれば、考えをまとめたり、資料を作ったりと時間もかかります。決して私にとって容易なことではありませんでした。でも、今回のラウンドテーブルを終えて、自分の頭の中はスッキリしています。日頃の悩みや迷いを皆さんと顔を合わせて話せた事、また一緒にグループの方々にアドバイス頂けた事、そして同じように迷ったり悩んだりして、皆さん業務に取り組まれていることがわかりました。自分達主事の業務も決して少なくはなく、履修プログラムに参加している他の方々も大変だと思っております。しかし、残りの時間を皆さんと一緒に学ぶことのできる貴重な時間だと思いがんばっていきたいと思います。

ラウンドテーブルに参加して

勝山市猪野瀬公民館嘱託主事 前川 裕子

6月22日(土)、23日(日)の2日間、「実践し省察するコミュニティー」実践研究、福井ラウンドテーブルは2年目の参加となる。

今回は、22日(土)ポスターセッション、23日(日)は学校(ZoneA)、教師(ZoneB)、コミュニティー(ZoneC)、授業研究(ZoneD)の方々が全国から参加されていた。

それぞれの分野を私は、1日目、ポスターセッション、2日目、は実践の長い道行きを語り展開を支える営みを聴き取る報告Ⅲで発表しました。

昨年、一度同じラウンドテーブルに参加させていただいた経験を活かし、ポスターセッションは大丈夫かなと思いましたが、やっぱり緊張してしまい、

きちんと聴き手の方に伝わっただろうかと心配になった。難しさを実感しました。

2日目は報告Ⅲで学校の教員であったり、教員コンサルタント、大学生の方とそれぞれ報告しあった。ここで私は今、公民館での問題点をとり上げ、皆さんに情報、アイデアをいただけたのがとても嬉しかったです。社会教育に必要な知識を学ぶことができた。

猪野瀬公民館が問題、課題としている各種団体の体育協会の町民運動会のこれからの運営について一般の方に意見をいただこうと検討委員会を立ち上げた。

このことを親身になって聴いてくださり子供からお年寄りまでが楽しく出来るような競技（レクリエーション的なこと）を教えていただいたり「地区ならでの運動会」にするにはどうしたらよいかいろいろと話しあえました。

地域を盛り上げたり、学校の生徒に喜んでもらえる事を考えるのは、皆さん場所や立場が違っても考えていることは共通しているのだと実感しました。

話す側、聴き取る側、それぞれ耳を傾け、活動の場面を共有し合う事ができた。

これからは、次のステップにつなげる事ができるようにしたいと思う。

私にとって今回のラウンドテーブルは3回目の参加になりました。初めての時に比べれば、2日間のおおまかな流れがわかる分余裕が出るのかと思っていましたが、発表をどのような内容とするのか、資料をどうするのかなどを考えるたびに、前回・前々回の方が楽だったのでは思いました。

迎えた一日目、ZONE-Cに参加した私は清明公民館の金木主事さんの発表を聞きました。日頃の業務で子どもと関わることの多い私にとって、と

ても聞きやすい内容でした。その中で特に心に残っているものとして「子ども達との関係を結ぶ中で、どこまでを受け入れてどこで止めるのかの判断に毎回迷う」というお話がありました。さらに同じ日に福井大学の学生さんと、人形劇グループの2年生と3年生の発表を聞く機会に恵まれました。こちらの活動も子ども達をメインにしての活動になっているようで、共通する部分が多くあり、私が質問を受ける場面がありました。質問された内容は、リスクマネジメントについてでした。私達は活動に伴い保険をかけたたりして、事が起こった際に事前に備えている。と伝えると子ども達のことを考えるのであれば必要ですよねとの答えが返ってきました。人形劇ブロックの活動は昨年結構大変だったらしく、業務を始めて間もない頃の自分と重なるものがありました。そして真剣にグループの運営や活動について語る姿に頼もしさも感じました。カリタス幼稚園の先生のモンテッソーリ教育についての貴重なお話もきけました。

自分のこれまでの活動を振り返ることが日常の業務の中では難しく、発表となれば、考えをまとめたり、資料を作ったりと時間もかかります。決して私にとって容易なことではありませんでした。でも、今回のラウンドテーブルを終えて、自分の頭の中はスッキリしています。日頃の悩みや迷いを皆さんと顔を合わせて話せた事、また一緒にグループの方々にアドバイス頂けた事、そして同じように迷ったり悩んだりして、皆さん業務に取り組まれていることがわかりました。自分達主事の業務も決して少なくはなく、履修プログラムに参加している他の方々も大変だと思えます。しかし、残りの時間を皆さんと一緒に学ぶことのできる貴重な時間だと思いがんばっていきたいと思います。

Zone D

福井ラウンドテーブルに参加して(中国語原稿の日本語訳)

台北市立大学幼児教育学系 福井参観訪問交流団 11人一同

小学生、中学生の発表を聞いて

ポスター発表には、子供たちがグループの学びや発見を整理して、グラフや図表で学びのプロセス及び成果をプレゼンしていた。グループ全員が前に出

てプレゼンできることが、勇気や自信だけではなく、協働で学び合った証だと思われる。幼い頃からこのように、自らの学びを発表する経験を、児童生徒に提供することを、私たちは見習うべきである。

大学生より探求ネットワークの実践を聞いて一年生から子供たちと年間を通して一緒にプロジェクトを活動することが、印象的だった。大学生にとっては、子供たちとやりとりする機会を得ることができる。子供たちにとっては、大学生とのふれあいを介して、教員を目指す大学生の姿を見ることができる。大学教員は、プロジェクトの段階に沿って、大学生の企画、実行、と省察をサポートする。大学教職課程は螺旋式でデザインされており、各課程が横及び縦に関連されている。これによって、各課程の横断的な応用ができるとともに、実践と省察の繰り返しができる。

実践現場と大学の連携

教育実践と省察を中心に、現職教員、研究者、大学生、と関係者たちが集まり、定期的、持続的にラウンドテーブルを行うことで、学びあいが広まる。

Zone D シンポジストたちの発表に二つの向上が含まれている。一つは子供たちの学び及び探究の深まりの向上、もう一つは、教員の実践力の向上である。参加者には、長年の教職経験を持つ教員がいる。彼らが熱心によりよい実践作りを議論する姿を見て、なぜ自分が教員になることを決めたのか、初心が改めて思い出された。台湾に戻ったら、自分の実践にもこのような省察をしたい。

登壇者の大橋教頭先生は、新しい学校に移動され、教育実践研究を推進するため、自分の思いや実践記録を校内で発信することに努力しておられる。わずか2年間で、このような取り組みが行われたことに感服している。大橋先生は、経験豊富な実践者なのに、今でも情熱に満ちている姿が、私たちの学ぶモデルになる。私たちも、文字で自らの省察を記録するように啓発された。

福井大学教育実践研究省察ラウンドテーブルに参加して

(中国語原稿の日本語訳)

東北師範大学附属小学校副校長 脱中菲

東北師範大学教育学部准教授 王艶玲

2019年6月21日に福井大学教育実践研究省察ラウンドテーブルにおいて、福井県の生徒ポスター発表、Zone D のシンポジウム及び幼少フォーラムに参加した。全体的に三つの感想を共有したい。

1. 授業研究を核心にした教育実践研究は教職開発の有効な方法である

Zone D は、幼小中高校の教員たちによる授業研究の実践発表だった。各校種の実践から、日本の授業研究の成熟度や普及度が高いことが伺える。先生方の実践研究は、問題意識が強く、計画→実施→効果→省察といった研究のプロセスを経て実施されている。このようなプロセスの中に、教員の教育理念、実践知、専門職のアイデンティティーが形成され、醸成されていく。

2. 授業研究において実践事実の記録、分析、成果が重視されている

事例発表の中、先生たちが実践研究の事実や情報を常に整理し記録している。記録及び省察が授業研究の不可欠な手段である。貴重なのは、実践者が様々、

複雑な実践の場から、子供たちの学びや変化を正確に見つけて、その事実を忠実に記述し分析していることである。特に原生態の実践場面においての子供たちの学びのプロセスの記録は、実践研究の豊かさ、複雑さを表している。これこそは、実践研究と理論研究の区別である。集団であれ、個人であれ、校内外で公開授業を開くこと、研究成果を発信することが意欲的に行なわれている。このように、実践研究者たちが、他人の見方を求めて、異なる視点から実践を捉え直す機会を得ることができる。これは、実践研究の開放性及び生成性を表している。

3. 実践課題の解決は、授業研究の唯一の目標だろうか

ラウンドテーブルに参加しながら、この質問をずっと考えていた。中国国内の授業研究や自分たちが実践している授業研究との大きな違いは、実践課題の解決が授業研究の唯一の目標か否かにある。唯一の目標であれば、もっと探ることができるだろうか。つまり、理論の発展、観点の提起、学説の形成に実

践の知恵が貢献できるのではないだろうか。発表された事例研究は、実践研究のプロセスを提示されたが、理論に関わる特定の課題への返答や検証することが言及されなかった。恐らく、これは、日本の授業研究と中国の授業研究の違いだろう。中国の授業研究は、実践訴求と学術発展の間に位置付けられて

いる。従って、中国国内の授業研究は、学術の発展や転換への影響を重んじている。ただ、このような付加された価値や目標があるから、多くの教員にとっては、授業研究の実施が難しく、深く関わることに躊躇している。教員の参加度の低さは、私たちが省察すべき課題である。

学会参加報告

「授業研究から学校改革に繋ぐ ～授業研究の質的転換への挑戦～」

福井大学連合教職大学院 岸野 麻衣



日本教育心理学会第 61 回総会 (2019 年 9 月 13～15 日、日本大学)において、「授業研究：実践を変え、理論を革新する」(木村優・岸野麻衣編著、新曜社、2019 年)の出版を記念して、「授業研究から学校改革に繋ぐ～授業研究の質的転換への挑戦～」と題する自主企画シンポジウムを開催しました。

授業研究は、教師の専門性をより高め、学校を専門職として学び合うコミュニティへと発展させていく、学校改革の鍵となるものです。本の中では、そのために、いかにして授業を見合い語り合うとよいのか、いかにして記録を書き読み合うと省察的に学びをより深められるのか、そのプロセスやサイクルの在り方について提起しています。その中から、シンポジウムでは、特に2つの点に焦点を当てて議論を進めました。

1つは、授業研究の質的な転換の提起としての「モード」です。「授業研究のモード・シフトのストラ

テジー」と題して、木村優先生(福井大学)と教職大学院の修了生である高間祐治先生(福井市美山中学校教諭)から、授業研究の質についての分析とそこでの実践的な工夫について話題提供を行いました。

もう1つは、モード・シフトに欠かせない「書く」ことによる省察です。「長い時間にわたる学びを捉え直す：『書く』ことによる省察と実践の再構成」と題して、岸野麻衣(福井大学)と福井大学連合教職大学院の前身となる「夜間主学校改革実践研究コース」の修了生であり、教職大学院設置の際には現職教諭でありながら客員准教授を兼任いただいていた牧田秀昭先生(福井市安居中学校校長)から、実践記録のありようについての分析と学校の中で記録を書く文化を培ってきた方法と過程について、話題提供を行いました。

話題提供を踏まえて、指定討論として松木健一先生(福井大学)から、「コンピテンシーを培う授業研究」という視点で議論を捉え直していただきました。フロアからは、学校の中で若い世代と協働して授業研究を進めていく上で壁になることが語られ、どんな難しさがあ



ることができるか、議論がなされました。シンポジウムを通して、本で提起した視点をより実践的に考え直す良い機会となりました。

学会での報告と教職大学院を離れたあとの取組について、お二人の先生から原稿を寄せていただきました。

「書くこと」は「考えること」

福井市安居中学校 牧田 秀昭

教職大学院とは、発足当時在職していた福井市至民中、県教育研究所、県教育庁学校教育政策課、福井大学教育学部附属中／義務教育学校と、職場が変わっても関わりを持ち続け、現福井市安居中学校でも変わらずお世話になっている。どの職場においても、長きにわたって染みついた「教師の協働」「教師の力量形成」を念頭に置いて勤めてきているつもりである。

さて、最近の学校現場で最大の問題点は、極論を述べると「考えない教師」「考えられない教師」の増加だと感じる。典型は、校務分掌等の業務の前例踏襲と、変わらない授業スタイル。「考える教師」に生まれ変わるには、教師同士の対話は欠かせないが、「考えられない教師」同士が対話をして、優秀なファシリテータが入らない限りは、なかなか化学変化が起きないのも残念ながら事実である。

そこで、深い省察を促すものとして、私は「書くこと」が欠かせないと思う。確かにハードルは高く、尻込みするのも分かるが、いきなり超大作を目指す必要はない。授業についてなら、誰でも何らかの思いは持っているので、取りあえずは書けるものである。授業実践記録を複数回執筆すると、自ずと内省を促され、ものを「考える」ということがどういうことかを実感でき、授業以外のことにも波及する。日本教育心理学会では、異動のたびに、「その職場の実態にふさわしい記録をどうやって取り入れたか」を紹介させてもらった次第であり、その一部を紹介する。

私が最初に「ナラティブな実践記録」の洗礼を受けたのは、福井大学教育学部附属中学校で刊行した「探究・創造・表現する総合的な学習(1999)」の執筆であった。それまでの附属中は、個人での論文執筆が盛んで、県を代表する実践や研究が提案されていたが教科の壁は高く、このような群雄割拠状態では、ライバル関係は築けても教科を越えた協働は起こりにくかった。そこで総合的な学習の実践を軸にして、誰もが読めて語れる記録に挑戦したのである。

しかし、言うほど簡単ではない。そもそも終わったことを書くことに何の意味があるのか、ある特定の生徒のことだけでいいのか、正直よく分からず書いていた。「教師が何をしたいのか」ではなく、「生徒が実際何をどのように学んだのか」が、次の授業デザインにとって圧倒的に重要であると実感するには少し時間がかかったのである。しかし、この段階では、まだそれぞれの実践レベルであった。

次の出版「中学校を創る(2004)」に、同じ生徒ではないが、入学から卒業までの実践(エピソード)を意図的に並べることで、生徒の成長の軸を実感できるようになった。長期にわたる学びが、生徒の中で意味を持って結実することの重要性とその仕掛けを感得することができたのである。こうなると、普段の授業においても、生徒の学びの「瞬間」と同時に、長期の展望の中での「位置」が見えてくる。正確に言うなら「見ようとして、見えるように感じてきたことを自覚する」ということである。さらに、この本では「教師の学び」の記録にも挑戦した。そこには教師の協働が描かれている。今となれば当然だろうが、教師の成長と子どもの成長は相似形だということを実感できる執筆となった。

この、3年間のロングスパンのプロジェクト型学習における成長を同じ生徒たちで追い、教師の仕掛け、そして実践コミュニティとしての学校づくりについて、「福井発プロジェクト型学習(2018)」を刊行した。文字通り、「縦書き」の物語であり、義務教育学校として立ち上がったタイミングでもあることから、全教師の拠り所になることを目指した。その間、「学びを拓く《探究するコミュニティ》(2009～2011)」全6巻が刊行されており、それぞれの分野では十分に語り尽くされていた感があつたので、3年間の子どもの成長の実際を前面に押し出したことの意義は大きい。読み解くことで、教科も含む、プロジェクト型学習の授業をベースとした学校づくりの理念も理解できるであろうし、学校づくりを次の次元へ引き上げる試金石ともなろう。もちろん、こ

れら出版を支え続けたのは、毎年発行し続けてきた研究紀要に掲載されている、個人の実践記録の継続と集積であることは言うまでもない。

「書くこと」は、単に事実を文字化する作業ではない。一旦筋を追って書いてからが本番であると考ええる。どんな学びがあったか（なかったのか）、その要因は何か、どこ（何）が分岐点となっていたのか等をについて、全体構成を考えながら修正を繰り返す。一旦寝かせるその過程で、「新たな言葉探し」をしているように私は感じている。ふさわしい言葉が見つければ腑に落ち、次は自分の思考ツールの1つになる。見つからない場合は力不足であり、様々な文献に戻ることにもなる。そして内容ごとに区切り、小タイトルを付け、最後にタイトルを冠する。これはあくまで私一人の書き方として、前任校で紹介させてもらった。

丁寧な実践記録は、その教師の「最低レベル」となる。したがって、次の授業デザインに大きく反映されるのは当然である。それにとどまらず、授業中の教師の「目線」や「選択」といった立ち振舞いにも表れる。「エピソード」を探しているのであり、「エピソード」が生まれそうな場を瞬時に設定して、生徒の思考を活性化する。「省察」から「見通し(Anticipation)」、「行動(Action)」、「省察(Reflection)」というAARサイクルが循環し、習慣化するのである。

しかし、これはある程度「書くこと」「読むこと」が文化となっている学校の場合である。普通はこうはいかない。安居中学校の昨年度の研究紀要は、各教科、1時間の授業実践内容を2時間分（その2時間の関係はない）と省察で構成されている。1時間分の実践内容は、指導案に「実際」を加えた表形式である。あまりにも形式的で、やらされ感しか残らない。存続も含めて思案していたところ、些細なことをきっかけに「授業での学びがない（刺激が強い

が、実際に教員集団から出てきた言葉）」ことを全教員で共有でき、単元全体を表す実践記録への変更を提案した。一人一実践、単元レベル、量は問わない、表形式や箇条書きはなるべく採らないことを共有し、福井市進明中学校の大橋教頭の実践記録を示す。今年度は「とにかく書く」ことに挑戦するのだが、この時点で、「実践そのものを考え直さない」という声が挙がっている。記録を基にしての教師の協働を目指す。したがって、「感想」は述べても「批評」はしない。

「書くこと」は実践記録に限ったものではない。「授業研究」に著されている「参観記録」も当然その中に含まれる。要は、いかに自省を促しているかを自覚することであろうと思う。これは日本教育心理学会では報告していないが、私自身も「書くこと」を続けている。附属中／義務教育学校副校長通信「Professional」、安居中学校長通信「learning Compass」である。A4・1枚の不定期発行で、一話完結が原則である。表形式や箇条書きは使わない。エピソードとストーリーを大切に、授業を含めた日頃の教育活動の一場面に対する私なりの価値付けが中心である。一般論ではなく、あくまで「私見」を綴っている。たった一枚の通信を書くのにも、かなりの神経を使い、書き続けることで子どもや教師の姿がよく見えるようになった。文字通り「考えている」ことを自覚している。私自身もこれまでの通信を読み直すことが非常に多く、次へのステップの一助となっている。

実践記録は「名刺代わり」だと言いつつ続けてきた。どんな形であれ「自分はこんな実践をしてきた者です」「こんな考えを持っている者です」とまとめて表明していくことは、「考える」教師のライフスタイルを支えるものと確信している。

「省察できた発表機会に感謝 !! 新たなエネルギーの沸騰」

福井市美山中学校 高間 祐治

教職大学院を修了して9年目になりました。至民中学校時代には立場があったからですが、微力ながら県内外の研究会で発表をする機会が多数ありました。沖縄で行われた日本教育心理学会第55回総会にも参加させていただいたことを記憶しています。4

年前に1学年1学級である小規模校の美山中学校に異動してからも、ひそひそと稚拙な実践を重ねていました。今回、日本教育心理学会第61回総会において、自主企画シンポジウムの話提供のお話をい

ただいて恥ずかしながら、発表をさせていただきました。

発表内容は木村優・岸野麻衣編著の「授業研究：実践を変え、理論を革新する」で書かれている授業研究の「4つのモード」において、本校の授業研究実践がどのように位置しているかを分析し、小規模校ならではの実践の苦悩と工夫を中心としたものです。各教科1人の学校で教科会もない。多数の校務分掌を抱えて報告文書などの事務作業に追われる日々。そんな中でスクールリーダーとして、学校をよりよく改革していきたいと取り組んだ内容の意味づけです。近年、上記のような学校規模からくる問題もあり、私の興味を中心は若手教員の育成の観点から、道徳の授業の取組や地域連携の在り方、行事の企画など勝手に命名していますが「多忙感を感じない多忙化解消の働き方改革」をテーマにした組織マネジメントにあります。そんな中で授業研究会の回数を減らし、時間だけに注目した働き方改革に着手する学校も少なくありません。このような学校にならぬよう、日々取り組んでいるわけです。

今回、発表の機会をいただいたことで、美山中学校での3年間の取組をじっくり省察することができました。発表するには発表内容を考え、それをわかりやすく表現するためのプレゼン準備をしなければ

なりません。プレゼンを創ることは「書く」取組です。この「書く」取組は私から多くの時間を奪い(言葉が悪いですが、費やし)ましたが、この多くの時間の中で過ごす数日間(決して多忙感を感じる、やらされている仕事をしている時間ではない)は、なんとも心地よく生き生きとしていました。発表の成功・成果も大切ですが、私にとっては準備する時間の方が有意義なものでした。まさに個人的ではありますが、授業研究のモード4にレベルアップした瞬間でした。また、他の先生方の発表を聞いて改めて「書く」文化の大切さも再認識できました。

現在、美山中学校と永平寺地区3中学校の4校は、合同で2年後迎える北陸四県数学教育研究大会で、「数と式」領域の授業研究発表の指定を受けています。おかげで授業研究に対するエネルギーが増し、自ら進んで単元のカリキュラムデザインのたたき台を作成しました。勢いよく「書く」ことができました。始まったばかりで、学校間の連携が必要なのですが、なかなか集まらない授業協働研究をいかに組織マネジメントするか、「多忙感を感じない授業研究会」にするか、これを実現させる挑戦が今の私の生きがいです。

札幌ラウンドテーブル報告

連合教職大学院が支えてくれた「札幌ラウンドテーブル」

「やってみて、振り返る、そして次へ」

ミドルリーダー養成コース2年/札幌大通高校 西野 功泰

大学院生活も残すところ数ヶ月となる。入学当初指導教官である鮫島先生から「北極星」(ビジョン)を見つけるよう指導していただいたのがついこの間のことのように感じる。大学院での学びを通じて、これまで自分自身が北極星だと思っていたものは、ことごとく手段でしかないことに気づかされてきた。いよいよ長期実践報告書を書き進めながら現時点の「北極星」を見つけ出す時がきた。

今年9月には、5回目となる教育に関するジャンルレスの公開研究会「札幌ラウンドテーブル」を成功裏に終えることができた。今年も大学院の関係者

の方々には多大なご協力をいただいた。本当に心より感謝している。

「札幌ラウンドテーブル」は、学校・地域・企業・その他の団体と共に、多様な実践と教育の営みを学び合い、共有・発展・発信していく場として、地元札幌に根付き始めている。

思い返せば今私がこの福井大学連合教職大学院に在籍しているのも、2012年から参加させていただいていた「福井ラウンドテーブル」とのご縁が全てである。初めて福井に足を踏み入れた際、内心最初で最後になると思いながら福井での3日間を過ごした。まさかその数年後に福井大学教職大学院の学生とな

ることは自分を含め誰も予想していなかっただろう。当時、私は以前から交流のあった、福井大学特命助教(現天理大学准教授)の杉山晋平先生に「福井大学で自らの実践を語りませんか」というお誘いを受けた。その当時、自らの実践を他者に対してじっくり語るという経験をしてこなかったことに気づかされた。教師になって自分の過去を振り返り、語ったのは、道立高校から市立高校を受験し直す面接試験の時ぐらいだった。面接官の質問に答えることがあっても、こちらから質問するようなことはない為、面接官はどのように私の話を受け取ったのかを知る由もなかった。

私にとってラウンドテーブルは、自らの実践を支え、推進してくれた恩人だ。「実践の省察」という言葉と出会うまでの私は、まさにストップウォッチで計ることのできる時間枠内での行動と選択を、自分の未熟な物差しと限られたコミュニティの評価によって判断していた。しかしラウンドテーブルは違った。テーブルでの対話の時間が、教師としての働き方、考え方、生き方を変える転機となったのだ。成功体験を語るのではなく、失敗体験をさらけ出す。現場で実践できていることだけを語るのではなく、実践したくてもできていない(していない)ことをさらけ出す。そして何より、何故それをする必要があるのか、しなければならぬのか、したいと思うのかを自問自答し、頭の中でピースを当てはめながら、自分自身の物語を語る。その語りに対して全国から集まった職種、校種、役職、年齢が異なる方々と対話を重ねていく。私は初回の参加でラウンドテーブルの虜になり、他者の実践報告にも自らの実践を重ね合わせた。そして、参加する度に札幌に戻って新たな実践の扉を開く勇気と知恵を得たのだった。

「同僚にもこの体験をしてもらいたい」そんな思いから、「札幌ラウンドテーブル」を始めることを

決めた。札幌初開催は100名ほどの参加者だった。しかし教員はそのうち2割しか集まらず、失敗したと落ち込んでいた私に「札幌ってなぜこんなにたくさんの方々がラウンドテーブルに参加するんですか？素晴らしいですね！」と声をかけてくださったのが、福井大学の先生だった。自分の中の当たり前が「札幌の価値」として認識できた瞬間だった。

この大学院在籍中は、連合教職大学院の皆様にご多大なご支援ご協力をいただいた。松木先生、小杉先生にご参加いただき、普段札幌では聴くことができない貴重なお話をしていただいた。また、木村先生には全体シンポジウムの司会進行を引き受けていただいた。普段の教育活動で、生徒たちに、多様な大人の価値観に触れ、本物の体験をさせることを大切にしている。

私を含め、札幌ラウンドに参加した全ての道産子が、松木先生や木村先生の価値観と本物に触れることができたことが嬉しい。その他にも私の指導教官である鮫島先生からは、分科会の企画を大変親身に指導していただいた。そして何よりこの大学院で出会った素晴らしい方々に札幌ラウンドテーブルにお越しいただき、私の大好きな札幌の仲間と出会ってくれたことはとても幸せなことであり、この繋がりが今後の財産である。

これまでの札幌ラウンドテーブルは、大通高校の教員のみで企画運営してきた。しかし、これからはより多くの方々と関わりながら、皆と共に大切に育てていきたい。そう気づかせてくれたのも大学院の学びである。

失敗を恐れず、「やってみて、振り返る、そして次へ」。

教育研究集会のご案内

※詳細については、各学校のHP等でご確認下さい。

福井大学で最新の教員養成カリキュラムに触れてみませんか？

福井大学 教育学部 教育実践研究 公開クロスセッション (教職学習個人誌報告会)

大学生が今、何をどのように学んでいるのか、大学生の生の声を聴いてみませんか？
主に教員を目指して福井大学教育学部で学んでいる大学生が、
普段どのように学び、それにどのような手応えを感じているのか
様々な形で展開される協働探究プロジェクトにどのような意味を見出しているのか
学外の皆様を交えて、じっくり語りたと思います。
高大接続の新たな形。学生による新学習指導要領の展望。
大学と社会をつなぐ新たな結び目として、すべての人に開かれたセッション。
多様な分野で活躍されている皆様の参加が、
これからの社会を担う学生のさらなる成長につながります。

■クロスセッションについて ～小グループでじっくり聴き合います～

- 大学生と高校生、学外（現職教員等）の方々が一緒になった6人程度のグループを組み、福井大学の学生が大学で取り組んでいることをお話しします。
- 福井大学の学生が進行役を務めます。
- 学外の皆様も、これまで取り組んできたこと、これから取り組もうとしていることがあれば、適宜お話し下さい。
- こうして、それぞれが取り組んでいることの意味を確かめ合い、今後のキャリア展望につなげたいと思います。

■日時と場所

①2019年12月14日（土）13:15～16:15

②2019年12月15日（日）9:15～12:15

福井大学 文京キャンパス 総合研究棟V
(教育系1号館)

14日（土）	スケジュール（案）	15日（日）
13:00 13:15	1階ロビーで受付	9:00 9:15
13:15 13:35	オリエンテーション 高大接続の展望	9:15 9:35
13:35 14:20	ポスターセッション (グループ席に移動)	9:35 10:20
14:30 14:45	自己紹介	10:30 10:45
14:45 15:25	報告①	10:45 11:25
15:25 15:55	報告②	11:25 11:55
15:55 16:15	セッションを振り返って	11:55 12:15

■申込方法

- 12月4日までにEメールで申込を行って下さい。

送信先： practice_fukui@yahoo.co.jp

件名： 公開クロスセッション2019参加申込

本文： 所属 [高校生は学校名・学年]、参加者 [氏名(フリガナ)]、
参加日 [①12月14日(土) or ②12月15日(日)]

その他 [ポスター発表希望等]

- 参加費は無料です。

問い合わせ先： ☎910-8507 福井市文京3-9-1 福井大学教育学部 遠藤貴広
Tel: 0776-27-8964 Email: endo@u-fukui.ac.jp

入試情報

令和2年度
福井大学大学院
福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学 連合教職開発研究科
入学試験に関する日程

第1回入学試験
令和元年11月23日(土)

出願期間
令和元年11月1日(金)
～7日(木)

ガイダンス
令和元年11月16日(土)
15時～16時30分

第2回入学試験
令和2年2月8日(土)

出願期間
令和2年1月24日(金)
～30日(木)

ガイダンス
令和2年2月2日(日)
14時～15時30分

第3回入学試験
令和2年3月7日(土)

出願期間
令和2年2月17日(月)
～21日(金)

ガイダンス
令和2年3月1日(日)
14時～15時30分

《大学院説明会》

冬期説明会 令和2年1月11日(土) 13時から
場所：福井大学文京キャンパス アカデミーホール

Schedule

11/9 Sat 月間合同カンファレンスA日程
11/16 Sat 月間合同カンファレンスB日程
11/23 Sat 令和2年度福井大学連合教職大学院
第1回入学試験
12/25-27 Wen-Fri 冬の集中A日程
1/4-6 Sat-Mon 冬の集中B日程

【編集後記】 本号には、6月のラウンドテーブルに参加してくださった方の声や、夏の集中講座のふり返り、秋の学会報告、10月の合同カンファレンスのふり返り等が編まれています。記録が、書いた人のその時の記憶や思考を蘇らせてくれるのはもちろんですが、読む側も書いてくれた方の記録を支えにその時のことを思い出すことができます。ニュースレターを読む/編む度に毎回湧き上がる気持ちではありますが、原稿をお寄せくださったみなさま、ありがとうございます。(Y・Y)

教職大学院 Newsletter **No.127**

2019.11.9 内報版発行
2019.12.3 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院 福井大学・
奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp